

「テッテレー」

【あらすじ】

お笑い芸人の浦安智弘は、リアクション芸で遅咲きのブレイク中。そんな彼の新人マネージャー竹本陽太は、あるドッキリ番組で仕掛け人になるも、あまりにも演技が下手すぎてVTRをお蔵入りさせてしまう。

浦安に叱られた竹本は、安さに釣られて怪しげな演技スクールに通うことに。そこで出会った女優のたまご、一ノ瀬美緒に一目惚れする。

レッスンに励むある日、竹本はスクールの裏の顔を目撃する。演技が上達した生徒に他人になりすました電話をかけさせ大金を騙し取る、特殊詐欺集団だったのだ。通報しようとしたところ、講師の荒井紗季に止められてしまう。紗季は、実は刑事で、潜入捜査中だった。そして、次に詐欺集団に取り込まれようとしているのが美緒だと知る。美緒は、昔いた芸能事務所に騙され、借金を背負っている。そんな彼女に魔の手が迫っていることを

知った竹本は、捜査に協力することに。詐欺集団に加わるため、紗季から特別な演技レッスンを受け始める。竹本はなんとか詐欺集団に潜入し、集団の指示役を探すもなかなか尻尾は掴めない。

潜入捜査に難航する中、ある番組で、「浦安の母親が危篤ドッキリ」の企画が上がる。竹本は躊躇したものの、演技レッスンの成果を見せる。すっかり騙された浦安の顔を見て、竹本はドッキリだと自白。企画は台無し。落ち込む竹本の元に、詐欺現場を目撃した美緒が集団によって連れ去られたと知らせが。竹本と紗季は助けに行くが、そこで思わぬ展開に。紗季は竹本に銃口を向けた。刑事だというのは嘘で、紗季は詐欺集団の指示役だったのだ。絶体絶命のピンチのときに、浦安が取材クルーと警察を引き連れて突撃してくる。竹本は紗季の嘘を見破っていて、先手を打っていたのだった。紗季を含めた詐欺集団は逮捕され、一件落着。

その後、平和な日々の中で相変わらずドキリ番組で忙しい浦安。若手女優の美緒との共演も増えた。竹本も、仕掛け人として浦安を支えるのだった。

【登場人物】

竹本陽太（23） 新人マネージャー

一ノ瀬美緒（22） 女優のたまご

浦安智弘（50） お笑い芸人

荒井紗季（29） アクターズスクール講師

千田一馬（20） 俳優のたまご

林冬馬（30） アクターズスクール講師

塚地卓也（35） アクターズスクール講師

浦安和子（80） 浦安の母親

高橋正則（52） 芸能事務所マネージャー

司会者

A D

プロデューサー

○ テレビ局・収録スタジオ

バラエティ番組の収録が行われている。

司会者「女の子持ち帰ったら週刊誌に撮られましたドッキリ！ ターゲットは今ノリに乗ってるサニー浦安です！」

○ 同・楽屋（隠しカメラの映像）

雑誌を読んでる浦安智弘（50）。

司会者の声「数日前浦安は番組で仕込んだ女の子と飲みに行ってます。その時の写真が撮られたとマネージャーから伝えられたら、浦安はどんなリアクションを見せるのか！」

竹本陽太（23）、入ってくる。

竹本「浦安さん！」

浦安「どうした？」

竹本「（棒読みで）大変ですー。週刊誌に撮られましたー」

○ 同・収録スタジオ

固まる司会者。

ざわつく観覧席。

○ 同・廊下

『ドッキリ大成功』と書かれたパネル
を持っているA Dとカメラマン、楽屋
前で待機している。

A D 「マジか」

○ 同・楽屋

竹本「（棒読みで）うわー、どうしょー、困っ
たなあー。社長、怒ってますよー」

浦安、ポカンと口を開けている。

○ 同・収録スタジオ

司会者「（スタッフに向かって）おい、どうす
んだよこれ。ドッキリってバレんだろ」

○ 同・楽屋

浦安「……うわああああ！ どうしょー！」

浦安、床を転げまわる。

浦安「イメージダウンじゃん！　うわぁ！
どうしよー！　金ならいくらでも出す！
だって貯金八百万あるからー！」

○ 同・収録スタジオ

観覧席から爆笑が起きる。

○ 同・楽屋

A D「テッテレー！　ドッキリでしたー！」
浦安「もおー、勘弁してくださいよお」

○ 同・収録スタジオ

司会者「いや最高だったよ！　貯金額まで暴
露しちゃってさあ」

浦安の声「ちょ！　絶対ピー入れてください
よ！」

○ 同・楽屋

浦安「ドッキリ、大成功ー！」

○ 同・廊下

竹本・浦安、A Dと話している。

竹本「お蔵入り?！」

A D「さすがに仕掛け人の演技が下手すぎ。

あれじゃやらせ疑われるんで」

竹本「撮り直しかでできませんか?」

A D「仕掛けに結構金も時間もかかってたんで、またっていうと……」

曲がり角から急にスタッフが出てくる。

浦安、派手に尻餅をついて、

浦安「うわあ! ビビったあ!」

A D「(吹き出して)あはは! やっぱサニ―

さんのリアクション芸おもしろ。まあ、また

次お願いしますよ」

浦安「ありがとうございます!」

○ 同・駐車場

竹本・浦安、歩いてくる。

死角から警備員出てくる。

竹本「(驚いて)うわっ」

浦安「（驚かず）お疲れ様でーす」

○ 車内

運転している竹本。

後部座席でタバコをふかす浦安。

浦安「リアクション芸人のマネージャーが仕掛け人でできなくてどうすんだよ！ 仕事無くす気か！」

竹本「すみません！」

浦安「俺にはもうドッキリしかねえんだよ。

ギャグもダメ、トークもダメで……」

竹本「（棒読みで）そんなことないですよー」

浦安「おい」

竹本「すみません。子どもの時からどうも嘘つくの下手で」

浦安「にしても大根役者すぎるだろ。お前、あれだ。なんか演技レッスンとか受けろ」

竹本「演技レッスン、ですか」

浦安「アクターズスクールとか、今いろいろあんだろ。その棒読み直せ」

竹本「経費で落ちますかね」

浦安「無理だな。お、そこ次曲がってくれ。

母ちゃんとか寄ってくわ」

竹本「あ、はい！」

○ 老人ホーム・駐車場

浦安、車から降りる。

浦安「演技レッスン、自腹でも通えよ」

竹本「はい……」

浦安「じゃ、お疲れ」

浦安、入り口に向かう。

○ 雑居ビル・入口

竹本、ビルを見上げ、

竹本「ここ？」

いかにも廃墟なビル。

竹本のスマホには、にこにこアクターズスクールの広告が表示されている。

『一か月五千円で通い放題！』の文字。

○ 同・廊下

竹本、キョロキョロしながら歩く。

ネズミが横切る。

竹本「……やっぱやめよう」

竹本、引き返そうとする。

一ノ瀬美緒（22）、歩いてくる。

竹本「あ」

美緒「あ。あの、もしかしてにこにこアクターズスクールの？」

美緒に見惚れていた竹本、我に返り、

竹本「あ、はい！ 今日から通う……」

美緒「私もなんです！ あれ、教室そっちですよね」

竹本「あ、行きましようか！」

○ 同・教室

年齢層広めな十人程度の生徒たちが席についている。

教壇に立つ荒井紗季（29）。

紗季「にこにこアクターズスクールで講師を

しています。荒井です」

紗季、千田一馬（20）を指さして、

紗季「あなた名前は？」

千田「へ、あ、千田です。千田一馬」

紗季「あなたはどんな自分になりたくてここに来たの？」

千田「えっと、僕、フリーで俳優やってるんですけど、オーディションは落ちてばかりで。周りにもバカにされて。でも、でも」

紗季、千田の肩を抱く。

紗季「ここで人生変わるよ」

千田「……はい！」

紗季「（竹本を指さして）あなたは！」

竹本「あっと……竹本です。えー、僕は、人を騙せるようになりたくて」

紗季「騙す……？」

紗季、竹本に近寄り顔を見つめる。

竹本、ぐくりとつばを飲み込む。

紗季、にこっと笑う。

紗季「（美緒を指さして）あなたは！」

美緒、恐る恐る立ち上がる。

美緒「一ノ瀬美緒です」

竹本、美緒を見つめる。

美緒「私は……。(前を向いて)私は、人の心を動かすような女優になりたいです。どんなことがあっても、絶対に諦めません」

美緒、竹本の視線に気づいてはにかむ。

紗季「あなたたちの夢は絶対に叶う！ 一緒に演じましょう！」

× × ×

紗季「はい、腹の底から声出すー！」

一同「あめんぼあかいなあいうえお！」

紗季、竹本の腹を力強く押す。

竹本「うっ」

× × ×

林冬馬(30)、ホイッスルを吹く。

教室内をぐるぐる走る生徒たち。

林「はい、あと十周！ 体力つけなきゃいい芝居なんてできないよー！」

千田、転ぶ。

竹本、千田に手を貸して起き上がらせる。

千田「すみません……」

竹本「大丈夫？ 休んだら？」

千田「いえ……。僕絶対自分を変えたいんで！」

竹本「……よし、一緒に頑張ろう！」

× × ×

千田「お宅の息子さんのせいなんですよ？」

竹本「（棒読みで）大変申し訳ございません」

塚地卓也（35）、カチンコを鳴らして、

塚地「カット！ 台本を読むのだけが芝居じ

ゃないんだよ！ もっと魂で演じなきゃ！」

竹本「はい！」

塚地「千田。お前はよくなってきたよ」

千田「ありがとうございます！ 実は次のオーダーデ^スイションも結構自信あ^つて」

塚地・林、アイコンタクトを取る。

竹本、見学してた美緒と目が合う。

美緒「（口パクで）頑張^つて」

竹本「（笑顔にな^つて）うん！」

○ テレビ局・楽屋

浦安「演技の方はどうなんだ？」

竹本「順調です」

浦安「どれ、見せてみる」

竹本、咳払いをする。

竹本「（棒読みで）浦安さん、大変ですー！」

浦安「学校変えろ」

竹本「ええ！ 上達してないですか！」

浦安「全く。むしろひどくな^つてねえか？ も

っといいところあ^んだろ」

竹本「でも……」

浦安「何だ。いい女でもいたのか」

竹本「（棒読みで）違いますよー。僕は仕事の

ために通ってんですからー」

浦安「お前はほんと嘘がつけないやつだな。

いてて……」

浦安、頭をさする。

竹本「さっきのタライ、大丈夫でした？ 柔
らかいのに変えてもらうよう言ってたんで
すけど」

浦安「それじゃいい音出ねえよ」

竹本「でも」

浦安「大丈夫だって。よし！ 次は電気ショ
ックだっけ。行くぞ！」

○ 雑居ビル・教室（夜）

美緒、走って入ってくる。

美緒「おはようございます！」

美緒、息を切らしながら竹本の隣に座
る。

竹本「大丈夫？」

美緒「ちよっとバイトが長引いちゃって」

千田の声「はよーっす」

竹本「あ、千田く——」

竹本、千田を見る。

全身ブランド服で高そうな腕時計を付けている千田。

竹本「千田くん？　なんか、雰囲気変わった？」

千田「そっすか？」

竹本「高そうな服着てるし……。もしかしてオーデイション受かったの？」

千田「（鼻で笑って）ああ。あんなんバカがやることっすよ」

竹本「え？」

紗季、入ってくる。

紗季「はい、おはようございます」

一同「おはようございます！」

○ 同・入り口前（夜）

竹本、入り口の方を気にしていると、

美緒、出てくる。

美緒「あ、竹本くん。お疲れ様」

竹本「お疲れ様。あー、お腹空いてない？」

美緒「空いてる！ 今日のエチュード結構動きあったもんね」

竹本「もしよかったら飯とか、どう？」

美緒「ごめん、この後バイトで」

竹本「え、これから？」

美緒「うん」

竹本「そっか……。大丈夫？ そんな働きづめで身体壊さない？」

美緒「稼がないといけないから。……。恥ずかしい話、私詐欺に遭ったんだ」

竹本「え」

美緒「前に入ってた事務所。ちょっと悪いとこだったみたいで。レッスン無料って聞いてたんだけど、実際は高額で。辞めた後もそのお金返さないといけなくてさ」

竹本「ひどいね」

美緒「騙された私が悪いの。だから泣き言なんて言っちゃいけない。そんな暇があったら早くお芝居で食べれるようにならなくちゃ」

竹本「……できると思う。美緒ちゃんなら」

美緒「ありがとう。じゃあまたね」

竹本「うん！ お疲れ様！」

美緒、歩いていく。

竹本、ため息をついてポケットを探る。

竹本「あれ。スマホ……」

○ 同・廊下（夜）

竹本、歩いてくる。

千田が教室に入っていくのが見える。

竹本、駆け出し教室に入ろうとする。

千田の声「俺、俺。そうタケシ」

竹本、「え？」と動きが止まる。

千田の声「いや実は今事故っちゃって。相手
ケガさせちゃったんだよね。うん、金がい
るって。百万くらい」

竹本、教室をのぞくと、電話をかけて
いる人々の姿。

林「おお、なかなかいいじゃん。すぐ即戦力
になるよ」

千田「ありがとうございます！」

男「（電話しながら）クリックしたからには払ってもらわないと」

塚地「（電話しながら）こちら警察なのですが、あなたのキャッシュカードが」

机の上に札束やキャッシュカードが置いてある。

竹本「これ……」

竹本、後ろから何者かに羽交い絞めにされる。

抵抗むなしく隣の倉庫に引きずり込まれる。

○ 同・倉庫（夜）

解放され見ると、紗季だった。

竹本「荒井先生！」

紗季「しっ！」

竹本「あのあれって」

紗季「……そうよ」

竹本「あれ詐欺ですよね？」

紗季「オレオレ詐欺に架空請求。何でもやる

特殊詐欺グループ。にこにこアクターズスクールは俳優や女優のたまごを育ててるんじゃない。詐欺師を育ててるの」

竹本「通報しないと！ あ、スマホ……。交番に！ お巡りさん！」

紗季「待って！ 警察ならここにいる！」

竹本「え？」

紗季「私は刑事なの」

紗季、警察手帳を見せる。

紗季「潜入捜査中」

竹本「先生が？ じゃあ今すぐ逮捕——」

紗季「できないの。今逮捕したってトカゲのしっぽ切りみたいなもん。指示役を掴まなきゃ」

竹本「でも目の前で犯罪が行われてるんですよ？ 千田くんだって巻き込まれてるし！」

紗季「……実は、次に狙われてるのは美緒さんなの」

竹本「美緒ちゃん？」

紗季「彼女お金に困ってるでしょう。そうい

う子を取り込みやすいのよ」

竹本「だったらなおさら早く逮捕してください」

い！」

紗季「下手に動けば美緒さんの命が危ない。

ここはやばいところと繋がりもあるから。

竹本くんはこのまま何も知らないフリをし

て」

竹本「そんな……」

紗季「それが一番安全なの。信じて」

紗季、竹本の目をじっと見る。

竹本「……はい」

紗季、出て行く。

塚地の声「何かありました？」

紗季の声「いいえ、何も」

立ち尽くす竹本。

○老人ホーム・個室

ノックの音。

竹本、入ってくる。

竹本「失礼します」

浦安「おう、悪いな」

竹本、菓子箱を浦安に渡す。

竹本「いえ、全然。ご無沙汰してます」

ベッドに座っている浦安和子（80）。

和子、竹本を見てにこにこしている。

浦安「これだろ？ 前食いたって、母ちゃんが言ってたやつ」

和子「智くんのお友達？」

浦安、竹本にアイコンタクトを取る。

竹本「（棒読みで）あ、はい！ 智くんにはい

つもお世話になってて」

和子「ゆっくりしていつてね」

浦安「お茶でも淹れようか」

和子「あらあら。すみませんねえ。息子の分もお願いできますか？」

竹本、ハッとして浦安の顔を見る。

浦安「はいはい。かしこまりー」

○ 同・入り口前

浦安・竹本、出てくる。

竹本「お母さん、お元気そうでよかったです

ね」

浦安「まあ身体はな。最近またひどくなった
らしくってもうしっちゃんかめっちゃんかだよ。

息子すら分かんないんだから」

竹本「……」

浦安「ま、ダラダラ芸人続けて食い潰された
挙句、面倒すら見ないんだから。こんな息
子忘れたいか」

竹本「でも浦安さん、給料はほとんどお母さ
んのために使ってるじゃないですか。この
施設だって。浦安さんが休まずに働いたか
らこんないいところに移れたわけで」

浦安「皮肉なもんだよなあ。騙された金で親
孝行なんて。母ちゃんは騙されて苦労した
っていうのに」

竹本「騙された？」

浦安「投資詐欺っていうの？　それで父ちゃ
ん借金作って逃げたんだよ。最近また流行
ってんだろ。なんか企画来てなかったか？」

竹本「あ、はい。浦安さんが受け子経験のあ
る非行少年にインタビューするって」

浦安「また俺ボコボコにされるやつか？」

竹本「一応演出として入ってますけど、あと
で断ろうかと」

浦安「あー、いいいいいよ。あっちもその画
撮りたくて俺呼んでるんだし」

竹本「でも」

浦安「いいって。にして物騒な世の中だよな
あ。俺でさえ金なくても犯罪には走らな
かったよ。今じゃ結構身近だからなあ」

竹本「はい……」

○ 同・教室

竹本、美緒の顔をじっと見ている。

美緒「どうしたの？」

竹本「（棒読みで）何でもないよ」

美緒「絶対何かあるよね？」

紗季「竹本くん！」

ビクッとする竹本。

紗季「ちょっと来てくれる？」

○ 同・倉庫

紗季「何であんたはそう演技が下手なの！」

竹本「すみません」

紗季「私に任せてくれればいいから。竹本くんはもう、本当に何もしないで」

竹本「……指示役が分かればすぐ逮捕できるんですよ？」

紗季「そう。今捜査中だから余計なこと――」

竹本「じゃあ僕が協力します！」

紗季「え？」

竹本「僕も詐欺グループに入ります！　それで先生と一緒に指示役を探します」

紗季「いやいや一般人を巻き込むわけには」

竹本「早くしないと、美緒ちゃんが危ないんですよ！　僕を入れてください！」

紗季「うーん……」

竹本「荒井先生！」

紗季「はつきり言ってあなたの演技はゴミで

す」

竹本「ゴ……」

紗季「なんでそこまで下手にできるかなってくらい。にこにこアクターズスクールはね、お金に困ってる子だけを引き込んでるんじゃないの。詐欺に必要な演技力を身に着けた子を仲間にしてるの。今あなたを入れたら、私が怪しまれる」

竹本「じゃあ先生が教えてください！　演技を！」

紗季「は？」

竹本「授業以外でも、つきっきりで！」

紗季「なんでそんなこと」

竹本「潜入捜査って演技力が必要でしょ？

荒井先生はそれができてる！　その技術を教えてください！」

紗季「何でそこまで」

竹本「（棒読みで）別にただの正義感ですよー」

紗季「（ため息をついて）……分かった。けど覚悟しといてね。私のやり方で行くから」

竹本「はい！」

○ 街中

中年の女、女子大生の手を取り、話し込んでいる。

中年の女「ほんとすべすべ。あら、でもお顔は……。シミの元ができてる！」

女子大生「ええ！」

中年の女「私も若い時はそうだったんだけどねえ。化粧水変えてからもうお肌つやつや」

中年の女、バッグから化粧水ボトルとパンフレットを取り出す。

中年の女「絹ごし豆腐肌って知ってる？」

竹本、中年の女と女子大生の間に割り込んで、

竹本「（棒読みで）わぁそれ気になりますー」

中年の女「何お兄さん」

女子大生、竹本に怪訝な顔をして去る。

中年の女「ああ！」

竹本「（棒読みで）試してみてもいいですか」

中年の女「もう！」

中年の女、竹本に肩をぶつけ去る。

男の声「一万預けるだけで十万に」

竹本、慌てて男を追いかける。

竹本「僕も聞かせてください！」

○ カフェ・店内

男「でね、このアプリにキャッシュカード情報を入力するだけなんだよ」

竹本「（棒読みで）すぐお金に困っていたからー。僕、奨学金返さないといけなくて」

目が泳いでいる竹本。

男、キョロキョロ周囲を見渡す。

男「何。なんか撮影？」

竹本「はい？」

男「いるんだよな。マルチ引っかけたとか言ってネットにあげるやつ」

男、慌てて手で顔を隠し出て行く。

竹本「先生のやり方ってこれですか？」

竹本、振り返ると、後ろの席にいた紗

季。

紗季「そうよ。お金に困ってる演技をして、

マルチの話を聞く」

紗季、竹本の隣に座る。

紗季「いい？ 演技っていうのはどれだけ騙せるかっていうことなの」

竹本「騙す……」

紗季、竹本のバッグの中から大量のパンフレットを取り出す。

紗季「投資に化粧水に浄水器。あなたからお金を取ろうとした奴らは何してた？」

紗季、竹本に顔を近づける。

紗季「目をじっと見てたでしょう？」

竹本「確かに。言われてみれば」

紗季「私の目には何が映ってる？」

じっと見つめ合っている竹本と紗季。

紗季「あなたでしょう？ 人は自分の信じた

もののしか見ない。だから、自分が映って

いる目を信じちゃうの」

竹本「騙す時ほど、目を見ろってことですか？」

紗季「そう。あなたの目は泳ぎすぎだから意味ないけど」

竹本、慌てて手で目を覆う。

紗季「じゃ、その調子で。騙されれば騙されるほど、いい演技ができるわよ」

紗季、出て行く。

竹本、ため息をつく。

女の声「そうなの！ お友達を紹介するだけで一万円——」

竹本、声がした方に駆けていく。

竹本「（棒読みで）僕興味ありますー」

○ 雑居ビル・廊下

電話をしている美緒。

美緒「はい。すみません、今月ちょっと厳しくて。いや、利子上げるのは勘弁してください。はい、なんとかします」

美緒、電話を切りため息をつく。

千田、美緒に駆け寄る。

千田「美ー緒ちゃん。またこれからバイト？」

美緒「うん」

千田「そっか。俺は買い物。腕時計でも買おうかなって」

美緒「いいね。最近おしゃれだもんね」

千田「まあ、いいバイト見つけたから」

美緒「そうなんだ」

千田「興味あるなら紹介しようか？」

美緒「あゝ……。とりあえず今のところ続けるから大丈夫。ありがとね。じゃ、お疲れ」

美緒、歩いていく。

千田、美緒の後姿を見つめる。

○ 繁華街（夜）

竹本「（棒読みで）僕本当にお金に困ってて」

男「ひやかしならどっか行け！」

男、竹本の前から去る。

遠くで見ていた紗季、舌打ちする。

紗季「全然ダメ。見てな」

竹本「え」

若い女性に話しかけている女。

紗季、女に駆け寄って、

紗季「あの、すみません……。ちょっと聞こ
えちゃったんですけど、無料で資格の勉強
ができるって……」

女「え？ ああ、はい。最短一か月で国家資
格が――」

紗季「本当ですか！」

紗季、女に詰め寄る。

紗季「あ、ごめんなさい、大きな声出しちゃ
って。実は仕事を探してて、資格があれば
いいかなーと」

女「あらあ、そうなの？」

紗季「はい……。シングルマザーで、娘が三
歳なんですけどね。ママ、お腹空いたって
毎日……」

紗季、泣き出す。

女「じゃあぜひ！ こちらお渡ししますね！
あともしよければちょっとしたお仕事も紹
介できるんだけど」

紗季「ええ！ お話聞かせてください！」

女「じゃあカフェとか入りましたよ。確かあつちに」

女、後ろを向く。

紗季、その隙に竹本を連れて立ち去る。

○ 駅前（夜）

紗季「これくらいできなきゃ」

竹本「すごかったです……。でも娘さんいるのは本当ですよね？」

紗季「嘘に決まってるでしょ」

紗季、鏡を見ながらアイメイクを直す。

竹本「ええ……。すごいリアリティあったのに。警察になると演技力も身につくんのですか？」

紗季「……私もね、昔は女優志望だったの」

竹本「そうだったんですか！」

紗季「子どもの時から刑事ドラマが好きでね。

それに出てた女優に憧れて。オーディション受けてたり小っちゃい劇団に入ったり。ま、ダメだったんだけど」

竹本「それで刑事に？」

紗季「……そ」

竹本「それ女優になるよりすごくないですか。

本物になっちゃったっていうか」

紗季「そうね。で、分かったの？ あれくら

いは余裕でできないと、にこにこアクター

ズスクールはあなたなんか入れないよ？」

竹本「はい！ 最初はなんだこれ、意味あのかよ、適当にやってるんじゃないかよって思いましたけど、先生の演技見て納得しました。頑張ります！」

紗季「素直ね」

竹本「それに僕がこうすることで被害に遭う人が減るし、正義ですね！」

竹本、駆け出し、他の人に声をかけていた人に話しかける。

紗季「正義ね」

○ 雑居ビル・教室（夜）

教室の真ん中で立っている竹本と美緒。

二人を囲んで生徒たちが見学している。

千田、スマホをいじってあくびをする。

美緒「じゃあ私が犯人だって言うの？」

竹本「そうです！　あなたはお金に困っていた。だから遺産目当てでご主人を殺したんだ！」

塚地「カット！」

拍手する生徒たち。

塚地「竹本！　すごくよくなったよ！」

竹本「ありがとうございます！」

林「本当に見違えたよ。最初はあんなにひどかったのに」

竹本「（咳払いして）実は役者に転身しようかなーって思ってるんです。まあ今は金ないんで無理ですけど」

塚地・林、顔を見合わせる。

竹本、紗季を見る。

紗季、頷く。

林「まあいろいろ相談乗るから。今日この後ちょっと残って」

竹本「……はい！」

塚地「美緒はどうした？ 声に張りがないよ」

美緒「すみません。ちょっと、疲れてて」

林「よかったら相談乗る——」

竹本「（割り込んで）あー！（棒読みで）今

日は僕がたくさん相談したいんで」

紗季、小さく舌打ちする。

林「そう？ まあ、またいつでも」

美緒「ありがとうございます」

塚地「じゃあ次は杉木と新田——」

○ 同・廊下（夜）

美緒「じゃあお疲れ様」

竹本「気を付けて」

美緒「うん」

竹本「……あの！」

美緒「うん？」

竹本「任せて」

美緒「うん？ うん。頑張って」

美緒、歩いていく。

竹本「……よし！」

○ 同・教室（夜）

電話をかけている生徒たち。

千田「ようこそ。これで勝ち組ですよ」

竹本、苦笑いする。

塚地「勘違いしないでほしいんだけど、俺ら別に悪いことしてるわけじゃないんだよね」

竹本「へ？」

塚地「経済を回してるわけ」

林「騙されるようなバカが金持っても仕方ないでしょ？ 持つべき人が持たないと」

笑う塚地・林。

竹本、紗季を見る。

無表情の紗季。

紗季「（口パクで）笑え」

竹本「あ、あはは」

林「少しずつ覚えてくれればいいから。分かんないことあったら何でも聞いて」

竹本「はい。あの、指示役は誰ですか？」

塚地「はあ？」

林、竹本に詰め寄る。

林「竹本くんには関係ないんじゃない？ それとも知りたい理由とかあるわけ？」

竹本「いや、あの」

紗季「彼の教育係は私がします」

林「荒井先生」

紗季「良くなってきたとはいえ、彼の演技はまだカスレベルですから。このままだとうちに損害が出ます」

塚地「じゃあよろしくお願いします」

林「はい、じゃあ今日もガンガン回していきましょー。このまま負け組いいんですか？」

千田・生徒たち「勝ちます！」

ビクツとする竹本。

○ 同・倉庫（夜）

紗季「バカなの？ いきなり指示役は誰かなんて聞く？」

竹本「すみません、でも早くしないと美緒ち

ゃんが」

紗季「お願いだから余計なこととはしないで」

林の声「俺たちがしてるのは？」

生徒たちの声「社会貢献！」

塚地の声「悪いのは？」

生徒たちの声「騙される方！」

竹本「あんなのある意味洗脳じゃないですか」

紗季「だから千田も平気でいられるんでしょ

うよ」

竹本「今はちよっとお金に目がくらんでるだ

けだと思います。千田くんは、バカにされ

ても続けたいって、まっすぐ役者を目指し

てたんですよ？」

紗季「まあ叶わない夢を追うよりは、堅実だ

と思うけど」

竹本「警察がそんなこと言っているんです

か！」

紗季「警察は間違ったことは取り締まられても、

正しい道に導くまではできないからね。結

局は本人次第でしょう」

竹本「そんな……」

○テレビ局・廊下

歩いている竹本。

ふと壁のポスターが目に入る。

『新人発掘オーディション』の文字。

竹本、ポスターを見つめる。

浦安の声「はい、すみませんがよろしく願
いします」

竹本、見ると電話をしている浦安の姿。

浦安、電話を切る。

竹本、浦安に駆け寄る。

竹本「何かありました？」

浦安「ああ、別に。母ちゃんの施設から。熱

出したから病院連れてくって」

竹本「え、大丈夫なんですか？」

浦安「大丈夫、大丈夫」

竹本「仕事キャンセルできるか連絡——」

浦安「大丈夫だって。俺みたいなのが仕事す
っぱかすわけいかねーだろ」

竹本「でも……。今日ローションの予定なんです、終わってもすぐには帰れないですよ」

浦安「大丈夫だって言ってるだろ。仕事無くなったらどうすんだよ。俺にはこれしかないのに」

プロデューサー、歩いてきて、

プロデューサー「お、サニーじゃん」

浦安「お疲れ様です！」

プロデューサー「わっ」

浦安「うわー！ もー！ やめてください

よ！ 心臓泊まるかと思った！」

プロデューサー「あはは、やっぱいいねー」

○ 雑居ビル・教室（夜）

千田「うん。この金で慰謝料払えるよ。ありがとお母さん」

林「いいね、いいね。どんどん良くなってるよ。こりゃ千田のデビューの日も近いな」

千田「はい！ 早く経済回したいです！」

林「竹本も見習え。（電話をかけて）あ、こち

ら警察ですけどもー」

林、立ち去る。

竹本、千田に耳打ちして、

竹本「ちよっといいかな」

千田「はい？」

○ 同・非常階段（夜）

竹本、千田にポスターを差し出す。

千田「何すか、これ」

竹本「今日テレビ局で見つけたんだ。スター
ネクストって事務所知ってる？」

千田「まあ大手ですから」

竹本「そこが新人オーディションするみたい
で。千田くん受けないかなって」

千田「はあ？」

竹本「ここってめったにオーディションする
ことないからチャンスだよ」

千田「いやいやスターネクストって業界でも
超トップじゃないですか。そんじよそこら
の人受かるわけないでしょ」

竹本「でも受けなきゃ始まんないでしょ」

千田「俺もうバカみたいなことすんの辞めた
んで」

千田、竹本に腕時計を見せる。

千田「これいくらだと思います？ 百万つす
よ、百万。先生たちがもう飽きたからって
くれたんです。あの人たち、こんな高いモ
ノバンバン買い替えるんですよ？ すごい
でしょ」

竹本「でもそのお金は」

千田「俺も早くあなりてえ。デカイ舞台で
演技するより、電話でチャチャツと他人の
フリする方がコスパ良くないですか？」

竹本「千田くん、目覚ましてよ。犯罪だよ？」

千田「犯罪じゃないですよ、経済回してるだ
けど」

竹本「千田くん！」

千田「偉そうに言える立場なんですか？ サ
ニ―浦安みたいな三流芸人のマネージャー
ごときが」

竹本、千田の胸ぐら掴む。

千田「竹本さんだってでっかい夢見ましようよ」

千田、竹本の手を振り払う。

竹本「千田くん言ってたよね。自分を変えた
いって」

千田、ポスターを破り風に乗せて捨てる。

千田「はい。だから変わりましたよ。もう前
みたいな負け組じゃない」

竹本「今みたいな自分に変わってたかったの？」

千田、ドアノブに手をかける。

竹本「応募者は全員面接するって！ 自分を
変えるならここだよ！」

千田、振り向かず中に入っていく。

○ テレビ局・エントランス

モニターに刑事ドラマのCMが流れて
いる。

ベンチに座りじっと見つめている紗季。

竹本、歩いてくる。

竹本「荒井先生！」

紗季「何よ。人を呼び出して」

竹本「すみません。犯罪現場って思うとあんまり行きたくなくて。美緒ちゃんも最近バイト忙しくて通ってないって言ってたし」

竹本、紗季の隣に座る。

竹本「で、どうですか？ 指示役は見つかりましたか？」

紗季「そう簡単に見つかったら苦労しないよ」

竹本「そうですね……。僕みたいな下っ端が聞いても無駄だし。どうしたらいいんでしょう」

スタッフ「まもなくオーディション始まりまーす。参加される方は第一会議室までお越しください」

竹本「あ、今日か……」

歩いていく千田が見える。

竹本「あ、千田くん！」

千田、竹本に気づき目を伏せる。

竹本「……頑張って！」

千田、竹本に向かって力強く頷く。

竹本「千田くんは絶対に変われますよ」

紗季「……そうね」

美緒の声「あれ、竹本くん？」

美緒、竹本たちの方に駆け寄ってくる。

美緒「紗季先生も」

竹本「美緒ちゃん！もしかしてオーディション？」

「……」

美緒「うん。可能性は低いけど、チャンスは逃したくないから！」

竹本「美緒ちゃんなら絶対大丈夫」

美緒「ありがとう。じゃあね」

美緒、歩いていく。

竹本、ふとこちらを見ていた高橋正則

(52) に気づく。

何か分からないが一応会釈する。

高橋、視線を外して歩いていく。

○ 同・会議室

竹本「この間は本当に申し訳ございませんでした」

竹本、A Dに頭を下げる。

A D「いえいえ。サニーさん面白いんでぜひまたって、うちのPが」

竹本「ありがとうございます！」

A D「また仕掛け人やつてもらうんですけど、いけそうですか？」

竹本「任せてください！ 騙す特訓してきたので！」

A D「あざっす。（小声で）ここだけの話。今回の企画次第でサニーさんのレギュラー決まります」

竹本「本当ですか？」

A D「はい。で、今回のドッキリ内容なんですけど」

竹本、企画書をめくる。

竹本「え」

○ 同・楽屋

スマホを見ている浦安。

スマホ画面には『医療体制充実の高級

老人ホーム』のホームページ。

浦安、ため息をつく。

○ 同・廊下

竹本、マイクを仕込んでいる。

A D、インカムでやり取りしている。

竹本「……あの、やっぱり」

A D「使えないマネージャーいつまでもつけてると、タレントの方にヘイト向きますからね」

竹本「え」

A D「お願いしますね。じゃ、回します」

プロデューサーの声（インカム）「サニーのド

派手なりアクション引き出してよー」

○ 同・楽屋

竹本、入ってくる。

浦安「おう。タバコ買ってきてくれたか」

竹本、息を吸う。

竹本「大変です！　ホームから連絡があつて
お母さんが！」

○ 同・会議室

モニターで隠しカメラの映像を見てい
るスタッフたち。

プロデューサー「ここで浦安の泣き顔ド
ン！」

○ 同・楽屋

竹本、浦安の目を見つめて、

竹本「危篤だそうです！」

浦安「母ちゃんが……？」

目を見開き、動きが固まる浦安。

竹本、浦安から目をそらして、

竹本「――すみません！　嘘です！」

浦安「え？」

○ 同・会議室

プロデューサー「は？」

○ 同・楽屋

浦安「え？　どういふことだよ、竹本」

竹本「ドッキリ企画です。お母さんが危篤だと知らされたらっていう」

プロデューサー、入ってくる。

プロデューサー「おい！　何してくれてんだ

よ！　俺の企画潰しやがって！」

A D「落ち着いてください！」

A D・スタッフ、竹本に殴りかかりそうなプロデューサーを止める。

竹本「こんなのできないですよ！　いくらなんでもやっていいことと悪いことがあるじゃないですか！」

プロデューサー「サニ―なんか遠慮するかよ！　仕事選べると思ってるのか！　騒ぐだけしか芸ないやつが！」

竹本「浦安さんは――！」

浦安「――うわああ！　よかったー！　もう

心臓に悪いですってー！ 俺が危篤になっちゃうじゃないですかー！」

竹本「浦安さん」

浦安「でもほんとドッキリでよかったー」

浦安、鼻水をダラダラ流して泣く。

A D、浦安の顔を見て思わず吹き出す。

プロデューサー「これだよ。俺が撮りたかった画は。まったく台無しにしやがって」

竹本「でも……」

○ 同・駐車場

竹本、車の前で電話をしている。

竹本「はい。大変申し訳ございませんでした。

はい、後日改めて謝罪に行きます。あ、はい、社長も来てくださるんですか。はい、すみません、それくらいのことですよ。はい、申し訳ございません」

竹本、電話を切る。

○ 車内

竹本、運転席に乗ってくる。

後部座席で電話をしている浦安。

浦安「はい、ならよかったです。いえ、最近行けてないので元気かなと思って。はい、母のことよろしくお願いします」

浦安、電話を切る。

竹本、浦安に頭を下げる。

竹本「本当にすみませんでした！」

浦安「お前自分のしたこと分かってんのか」

竹本「この仕事は受けるべきじゃなかったです。すみません」

浦安「あのPの仕事断るバカいないだろ」

竹本「でも」

浦安「仕掛け人がいいリアクションも引き出せてないうちにネタバラシするかって話だよ」

竹本「すみません……。でもこんなドッキリできないですよ」

浦安「まったく、ちよつとはマシな演技できるようになったと思ったらこれだよ」

竹本「すみません……」

浦安「ほんとお前は嘘つけないやつだな。うち来た時も」

○（回想） 芸能事務所・所内
T「一年前」

浦安（49）、入ってくる。

浦安「おはようございまーす」

社員と面接をしていた、リクルートス

ーッ姿の竹本（22）。

社員「うちが第一志望なの？」

竹本「いえ！ 全部落ちたのでまだ募集していたこちらに」

社員「そ、そう。芸能関係に興味があったとか？」

竹本「全く無いです！」

社員、ため息をつく。

浦安、笑う。

社員「（気づいて）おお、浦安」

浦安「何、新人？」

社員「マネージャーの新卒採用で来たんだけどさあ。（小声で）正直すぎて」

浦安「いいじゃない。この業界じゃこういうやつが一人はいた方がいいよ。お前、俺のマネージャーやってみるか？」

社員「え」

浦安「やってみたいか？」

竹本「えっと、仕事ありますか？」

浦安「は」

竹本「サニー浦安って昔ちょっとテレビ出たけど、つまなくて今全然見ないですよ。マネージャーの仕事ってありますか？」

○（戻って）車内

竹本「本当に申し訳ございませんでした。あのときは仕事あるのかだけが気になって」

浦安「あの頃から変わんないな」

竹本「すみません。僕、クビですか？」

浦安「かもな」

竹本「ええ！」

浦安「……俺もそろそろ飽きられる。うちみたいなの小っちゃい事務所じゃ他に担当するタレントもいないからな。なんか新しい仕事見つけれ」

竹本「僕はずっとサニー浦安のマネージャーです。サニーさんは飽きられません！一番面白いんですから！」

浦安「……本当に嘘がうまくなったな」

竹本「嘘じゃー。あれ」

竹本、歩いている千田を見つける。

竹本「ちょっとすみません！」

竹本、車を降りる。

○ テレビ局・駐車場

竹本「千田くん！」

千田、立ち止まる。

竹本「オーデションどうだった？」

千田「……ダメでした」

竹本「そっか……。でもきつと次は」

千田「ダメに決まってるだろ！」

涙を流している千田。

千田「何回やったって無駄だよ。俺は一生バカにされるんだ。夢なんて、叶わない！ 自分を変えられないんだ！」

千田、走り去る。

竹本「千田くん！」

竹本、千田の背中を見送る。

○ 雑居ビル・教室（夜）

教室に一人の美緒、ため息をつく。

紗季、入ってくる。

紗季「あれ、お疲れ様」

美緒「先生」

紗季「そういえばこの間のオーディションどうだった？」

美緒「……ダメでした」

紗季「そっか……。そうだね」

美緒「やっぱり大手は厳しいのかなって思ったんですけど。最近、高校で同じ演劇部だった子がスターネクストに所属して」

紗季、美緒の隣に座る。

美緒「その子と、部内で主役をかけたオーディションしたことがあるんです。そのときは私だったのになあ」

紗季「逆転するなんて、この世界ではよくあることよ」

美緒「先生もそんな経験が？」

紗季「……劇団のトップ女優なんて言われてたけど、スカウトが来たのは脇役の子でね。あー、主役は私じゃないんだって、心折れちゃった」

美緒「それで教える側に？」

紗季「そう」

美緒「……私もそろそろ諦めつけなきゃなんですけどね。このままじゃ借金もロクに返せないし」

紗季「……うん。もう暗いから、早く帰なさい」

紗季、出て行く。

美緒「先生！……でも、一発逆転っていう

のも、ありえますか？」

美緒、紗季をじっと見つめる。

紗季、美緒の顔を見て、

紗季「あるよ」

○ テレビ局・廊下

竹本、スタッフに会釈して、

竹本「ではよろしくお願いいたします」

竹本、歩いていく。

高橋とすれ違う。

高橋、振り返って、

高橋「あの、すみません！」

竹本「はい？」

高橋「私、こういうものですが」

高橋、名刺を差し出す。

名刺には「スターネクスト芸能部」の文字。

竹本「スターネクストの？」

高橋「はい。この前オーディションのとき局にいらっしやいましたよね」

竹本「ああ、はい」

高橋「一緒にいた女性のことなんですか」

竹本「美緒ちゃんのことですか？」

○ コンビニ・店内

美緒、A T Mを操作し終える。

財布の中を見てため息をつく。

スマホの着信音。

美緒、電話に出る。

美緒「もしもし？」

○ テレビ局・楽屋（夜）

浦安、肩を回す。

浦安「今日の落とし穴は作りが雑だったなあ」

竹本「帰り整体寄ります？」

スマホの着信音。

竹本、電話に出る。

竹本「はい、竹本です」

千田の声（電話）「美緒ちゃんか！」

竹本「千田くん？ どうしたの？」

千田の声（電話）「助けて！」

○ 港・廃倉庫（夜）

物陰に隠れて電話をしている千田。

千田「美緒ちゃんが仲間に入るのを断ったんです。そんで通報するって言ったら指示役に絞めてもらうって連れ去られて！」

竹本の声（電話）「え！ どこに！」

千田「港の、今は使っていない倉庫——」

○ テレビ局・楽屋（夜）

電話が切れる。

竹本「もしもし！ もしもし！」

浦安「どうした」

竹本「すみません！」

浦安「あ、おい！」

竹本、走って出て行く。

○ 繁華街（夜）

走っている竹本。

電話をかけるが、通じない。

竹本「もう！ 先生！」

竹本、立ち止まり息を整える。

深呼吸して、スマホを操作する。

○ 港・倉庫（夜）

千田、塚地に殴られ倒れこむ。

椅子に縛り付けられている美緒。

美緒「千田くん！」

林「通報されたのか？」

塚地「（スマホを見て）いや、竹本に電話したらしい」

林「（鼻で笑って）あいつに何ができるんだよ。さて、君には選択肢が二つ。仲間になるか消されるか」

塚地「にこにこアクターズスクールの内情を知ったからには、もう女優なんて目指せないよー」

笑う林と塚地。

美緒「……最低」

塚地「顔はいいけど生意気な女だな。可愛げがないから女優になれなかったんじゃないか？」

林「まあどうするかはあの人がついてからにしよう」

竹本、物陰から様子を伺う。

周囲を見渡して、

竹本「いかにもな場所……」

塚地の声「とつととやろうぜ！」

竹本「やっぱり警察に」

竹本、スマホを手取る。

紗季、竹本の腕を掴み止める。

竹本「先生！」

紗季「しっ！」

竹本「電話したんですよ。出て下さいよ」

紗季「こっちもいろいろ準備してたのよ。外に応援を呼んでる」

竹本「本当ですか？」

紗季「私の合図で突入してくることになってるから」

竹本「合図？」

紗季「私が奴らに銃を向けて、確保。それが

合図の言葉」

紗季、竹本を見て、

紗季「信じて」

竹本「先生……」

林の声「誰かいるのか！」

紗季、竹本に頷く。

紗季・竹本、物陰から出てくる。

美緒「竹本くん！ 紗季先生！」

林「なーんかヒーローって感じ？」

塚地「大根役者が主役張れるのかね」

千田「竹本、さん……」

千田、ヨロヨロと竹本の元に行く。

竹本、千田の身体を支える。

竹本「変わったじゃないか」

千田、ホッとした顔をしてしゃがみ込

む。

竹本「美緒ちゃん！ もう大丈夫だから！」

竹本、紗季を見る。

紗季、頷き竹本に銃口を向ける。

竹本「え」

紗季「テッテレー！」

紗季、竹本に銃口を向けたまま塚地・

林の方へ移動する。

竹本「荒井先生？」

美緒「紗季先生？」

紗季「荒井？　紗季？　誰それ」

林「お遊びが過ぎますよ。指示役」

竹本「え……。まさか」

紗季「私がにこにこアクターズスクールの指示役。ベタ展開だからすぐバレると思ったんだけどなー」

竹本「そんな……。警察じゃ」

紗季「うっそぴょん。なーんで楽しんで稼げるのにそんな大変な仕事しないといけないのよ」

林「どうしますか、こいつら」

紗季「ま、バラす？　あ、殺すって意味ね」

竹本、うつむいている。

紗季「ちょっとは演技うまくなったかなと思
ったけど、騙されてるようじゃまだまだね。

棒読みくん」

竹本、顔を上げ、紗季をじっと見つめ
る。

紗季「何よ」

竹本「……テッテレー！」

倉庫のシャッターが開き、警察が突入
してくる。

紗季「は？」

林「何だよ！」

塚地「うわ！」

警察に囲まれた紗季・塚地・林。

浦安、取材クルーを引き連れて入って
くる。

浦安「ご覧ください。これが今世間で問題に
なっている特殊詐欺グループの実態です。

いやあ、企画内容を変えて緊急でカメラ回
しましたけど、すごいのが撮れちゃいまし
たね！ 非行少年にボコられるよりいい画

になったんじゃないですか？」

紗季「何で……」

竹本「すみません、騙してました」

紗季「はあ？」

竹本「先生に騙されたフリしてました」

○ テレビ局・廊下

竹本「美緒ちゃんのことですか？」

高橋「いえ、その隣の」

竹本「荒井先生ですか？ 荒井、紗季先生」

高橋「荒井、紗季。あれ本名じゃなかったっけ」

竹本「荒井先生が何か？」

高橋「昔、うちのオーディションに落ちた子だと思うんです。あのあと万引きとか詐欺とか、犯罪に走るようになったって聞いて心配はしてて。今は何を？」

竹本「え？」

○ （戻って）港・倉庫（夜）

竹本「それで警察に通報して、取材クルーも入れました」

浦安「ばっちり撮れてるよ！」

紗季「……やっぱ私の演技って下手なのかあ」

紗季、銃を捨てる。

警察が駆けてきて紗季たちを拘束する。

竹本「いえ、先生の演技は上手かったですよ。本当にぎりぎりまで迷いました。人違いなんじゃないのか、本当に警察なんじゃないのかって」

紗季「（へらッと笑って）あれ、どっかセリフミスってた？」

竹本「先生が教えちゃったんじゃないですか」

紗季「え？」

竹本「先生の目を見るまで、騙されてましたよ。先生の目を見たら」

× × ×

（フラッシュ）

紗季「信じて」

紗季の瞳に竹本が映る。

× × ×

竹本「自分を信じなくなりました。つまりそ

れは……」

紗季「（笑って）あんた役者になれば？」

竹本「……先生こそ。絶対いい女優になりますよ」

紗季、目を伏せる。

警察に連れていかれる紗季。

竹本、美緒に駆け寄り拘束を解く。

竹本「大丈夫？」

美緒「……私、一瞬揺らいだんだ」

竹本「え？」

美緒「お金があれば、地道にオーディション受けたり、辛いレッスン受けなくてよくなるかもって。夢なんて、諦められるんじゃないかって。でもダメだった」

美緒、微笑む。

美緒「私、諦めないよ」

竹本「……うん！」

○ テレビ局・楽屋

ノックの音。

竹本「はい」

美緒、入ってくる。

美緒「久しぶり」

竹本「美緒ちゃん！」

美緒「サニーさんの楽屋見つけたから竹本くんいるかなって。あれからバタバタして会えなかったから、会えて嬉しい」

竹本「俺もだよ！」

美緒「……竹本くん」

竹本「……美緒ちゃん」

○ 同・廊下

楽屋の外までリップ音が漏れている。

楽屋の前で口をあんぐり開けている浦

安。

○ 同・収録スタジオ

爆笑が起きる観覧席。

司会者「いやあ！ いい表情してるよ！ にしてもいい企画だね！ 自分のマネージヤーと今人気急上昇の女優、一ノ瀬美緒が熱烈なキスをしていたら。どう？ 千田くん」

千田「はい。もうめちゃくちゃ面白いです！」
司会者「いやあ、俳優さんは大笑いしてる顔もかっこいいね！」

○ 老人ホーム・食堂

テレビでドッキリ番組が放送されている。

スタッフと一緒に笑って見ている和子。
和子「あれね、私の息子なの。たくさんの人を笑わせて、すごいわあ。世界で一番面白いのよ」

○ テレビ局・楽屋

ラジカセからリップ音が流れている。

竹本、『ドッキリ大成功』と書かれたパ

ネルを持つ。

美緒と笑う。

竹本・美緒「せーの」

○ タイトル

『テッテレー』

【終わり】